

## 長嶋先生のこと

日本語日本文学科主任 兵 藤 裕 己

長嶋善郎先生は、一九九〇年四月に学習院大学に着任され、二〇一〇年三月をもって退任された。先生とわたしのおつきあいは、わたしが学習院大学に着任した二〇〇一年からであり、その前年の一二月二〇日、日文科の教職員の忘年会の席ではじめてお会いした。

その忘年会の席で、長嶋先生は司会をやっておられたようにおもふ。先生は当時、教務委員をされていたのだが（ちなみに、日文科の教員が引き受ける各種委員のなかで、教務委員はもつとも雑用の多いしごとである）、忘年会の司会などという雑用をつとめる長嶋先生（当時満六〇歳になられていたとおもう）は、失礼ないかたかもしれないが、けなげなようすにみえた。そんな先生の、いかにも誠実な態度とやわらかな物腰とが、次年度から学習院大学への着任が決まっていたわたしに、なんとなく安心感をあたえてくださった。先生のお人柄のなせるわざである。

当時、長嶋先生よりも年配の先生としては、田中章夫先生、土井洋一先生、吉田敦彦先生、諏訪春雄先生、十川信介先生などがおられた。そんな大先生方より十五歳あまり下の世代として、村野、佐々木、神田、山本の各先生や、わたしがいた。ふたつの世代に大きく分割されていた教員のなかで、長嶋先生は、ちょうど中間（よりやや上）の世代だった。上の世代の先生がたたくさんいらっしゃるなかで、長嶋先生のご苦労はひとしおだったとおもう。とくに先生が学科主任をつとめられた二〇〇四年から六年には、学科内でいろいろ困難なできごとがあった。

言語学者としての長嶋先生の学問について、畑のちがうわたしは、失礼ながら多くを知らない。ことし一月の先生の

最終講義の折に、あらためて先生の学識の広さ、深さを認識させられたようなしだいである。だが、長嶋先生の文章に、わたしはじつは大学院生の時分からしたしんでいた。先生は、ローマン・ヤコブソンの古典的な名著、『一般言語学』の共訳者のおひとりだったのだ。

わたしの専門は、国文学だが、芸能やパフォーマンスの問題に少なからぬ関心をもっていたこともあり、ヤコブソンのコミュニケーション理論は、大学院生の時分からくりかえし読んだ。また、ヤコブソンの詩学にも、じつに多くのことを教えられた。たとえば、わたしは、「隠喩」「メタファー」という語を、「詩的」「文学的」という語とほぼ同義のこ

とばとして使用するが、これはヤコブソンの『一般言語学』の影響である。

「詩的」「文学的」という、たぶんにあいまいなことを、厳密な学術用語としてつかおうとするなら、わたしたちは、いまだにヤコブソンの詩学をゆいいつの指針としなければならぬ。ソシユールを別格とすれば、文学研究に、もつとも大きな影響をあたえた言語学者は、まちがひなくヤコブソンである。そんなヤコブソンの代表的著述の邦訳に、若いころの長嶋先生はたずさわっておられたのだ。わたしは、ヤコブソンの邦訳をつうじて、大学院生のころから、長嶋先生の学恩を受けていたことになる。

長嶋先生のお人柄については、多くの方がご存知のとおりであって、わたしなどがここで喋々するまでもないとおもう。わたしの知る範囲でほんの一例をあげれるなら、たとえば、わたしが学習院大学に着任してからのこの十年間、同僚の教員のなかで、いちばんかず多くの学生の卒論指導を引き受けたのは、長嶋先生だった。じつにたくさんの方が、先生のおだやかなお人柄をたよりにしていたのである。

長嶋先生にかんするエピソードとして、もうひとつ逸することができないのは、大学の個人研究室をもつとも長時間利用されていた教員は、文学部全体のなかでも、長嶋先生をおいていないだろうということだ。わたしがまれに、休日などに用事があったて、じぶんの個人研究室にはいろうとすると、となりの長嶋先生の研究室は、たいいてい使用中のランブがついていた。休日でも研究室にこもっておられた先生は、ごじぶんの研究室をお仕事の拠点とされていたようであ

る。あれほど大学の個人研究室を利用されていた先生が、退職されてからはどうされておられるのか、ちょっと気がかりである。

それはともかくとして、日文科や文学部の年中行事には、退職された先生がたがおいでになる機会がかず多くある。学習院大学国語国文学会の大会、卒業生の謝恩パーティーなどなど。それらの機会に、こんごとも、長嶋先生のおだやかな笑顔を拝見できることを、日文科全体を代表して、心からを楽しみにしています。